

バフツ王国のアビンフォ祭り

—カメルーン、ティカールの事例—

下 休 場 千 秋

はじめに

20世紀において経済性、利便性を追求してきた地域開発は、自然・文化遺産の喪失、環境汚染、野生生物の絶滅など、様々な環境問題を引き起こした。21世紀に入った現在、私たちはどのような目標をもって地域計画を実行して行けば良いのだろうか。

従来、公共事業として、交通整備、資源・エネルギー開発、面的都市開発など大規模な社会資本整備が実施されてきた。それらの開発事業により、国土基盤整備の視点からの目標は達成してきたと言えるかもしれないが、大規模事業が実施された個々の地域環境は、果たして改善されたと言えるであろうか。地域の生活環境は、かえって悪化してきたと感じている人が多いのではないか。

それでは、今後どのような地域計画を考えて行けば良いのだろうか。その目標の一つとして、「地域力」を高めることが考えられる。地域の力を評価するには、経済力だけではなく、地域社会の活力、地域の福祉力、地域の独自性、交流人口を増やす集客力など多様な評価軸が必要となる。地域力とは、従来の経済性、利便性といった評価だけではなく、地域の生態学的特性や地域社会の歴史文化的特性に応じた環境整備と生涯学習機能の充実を図ることによって高めることが可能となる。

その文字通りに、今後の社会資本整備は社会的資本の蓄積を目指して、その基本となる生涯学習機能を充実させるための地域施策を実施して行くことが求められる。そのためには、地域の自然・文化遺産を保全し、それらの価値について学ぶことができるゆとりのある

環境整備を行うことを地域計画の主要な目的の一つにする必要がある。

本論文では、筆者が1986年以来、現在まで調査研究を続けてきた中央アフリカ、カメルーン共和国北西州に居住する農耕民・ティカール (the Tikar) の一王国である、バフツ (the Bafut Chiefdom) において、毎年12月に開催されるアビンフォ祭り (ABINE-MFOR) を事例とすることにより、そこから地域力を高める手がかりを得ることができるのではないかと筆者の問題意識がある。

西洋から広がった近代資本主義に端を発した地球規模での環境問題の深刻化、経済のグローバル化といった視点からは、アジアの日本もアフリカのカメルーンも同様な地域変容を受けていると言える。生活様式の画一化が進行しつつある現代社会において、異文化を理解する努力が重要であり、それによって自文化に対する理解も深まるのである。人類が保全し学ばべき自然・文化遺産として登録が進むユネスコの世界遺産の一つの事例として、今後は、個々の地域が世界に誇ることのできる遺産の価値を発見し、それらの保全と活用を目標とした地域計画を実行してゆくことが望まれる。地域力を高めるためにも、博物館を始めとした社会学習機能の充実が、長期的な観点からは重要であると考えられる。

本論文において筆者は、日本と比較して経済的・物質的には低水準ではあるが、豊かな自然と文化を維持してきたアフリカにおける祭りを通して、地域における真の豊かさとは何なのかを考察することにより、地域力を高めることを目指した地域計画のあり方の一端を明らかにしたい。

バフツ王国の歴史と文化

(1) カメルーン共和国の歴史と文化

カメルーン共和国の歴史において、15世紀にポルトガル人が進出して以来、オランダ人、イギリス人が交易や布教を目的として交渉を持った。1884年に開催された欧米列強によるアフリカ分割を話し合うベルリン会議により、カメルーンはドイツの保護領となった。第一次世界大戦後の1918年にフランス領とイギリス領となり、1960年にフランス領であった東カメルーンがカメルーン共和国として独立し、翌年の1961年、イギリス領であった西カメルーンの南部が独立し、カメルーン共和国とともに、カメルーン連邦共和国を結成した。ちなみに西カメルーンの北部はナイジェリアと合併した。その後、1984年に国名をカメルーン共和国に変更し現在に至っている。

カメルーン共和国の面積は47万5千平方キロメートル、人口は約1千5百万人で、植民地時代の経緯から公用語はフランス語と英語の二カ国語である。国内

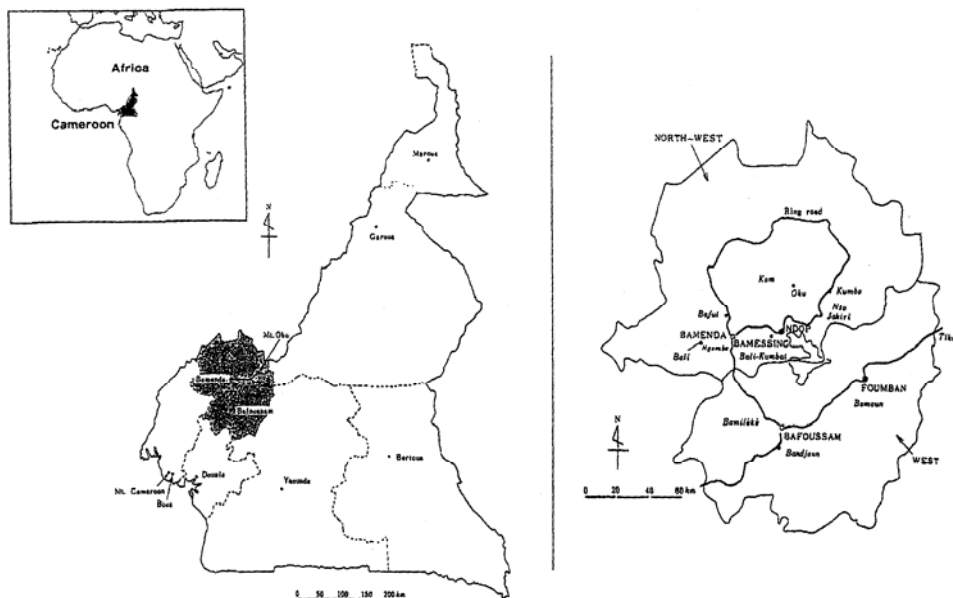
には200以上の部族が居住し、南部のバントゥー語系、西部のバントゥー語の近隣言語（バミレケ、バムン、ティカール）、北部のスーダン語族やフルベ、さらに南部森林地帯の狩猟採集民・バカの人びとに大別される。各地域では、公用語以外に部族語が用いられている。

自然環境としては、南部の熱帯雨林、中部の草原サバンナ、中西部の火山群高原地帯、北部チャド湖周辺の乾燥サヘルと、多様性に富んでいるため、これらの気候条件に適応したカカオ、コーヒー、バナナ、トウモロコシ、綿花、木材などの豊かな農業が営まれている。また、沿岸部では石油が産出されている。

(2) 北西州の王国文化

元英国領であったカメルーン共和国北西州には、主としてティカールの人びとによる200以上の王国が現存している。本論文において報告するバフツ王国はその中の五つの主要王国の一つである（地図1）。

ティカールの人びとは16世紀以降、北部地域から気候の乾燥化や遊牧民・フルベの影響により、現在地に



地図1 カメルーン共和国北西州、バフツ王国の位置図

移住してきたという伝承をもつ。彼らの文化の特徴は、現在も神聖王を中心に複雑な秘密結社を伴う社会組織を構成し、王宮を中心として土着宗教に基づく多様な祭祀と儀礼が行われていることである。また、王国文化に関する木彫・土器・染織を始めとする多様な民族芸術を製作する工人集団が存在することも特徴である。

(3) ティカールの人びとの信仰

バフツ王国を築いた先祖達は、他のティカールの人びとと同様に 16 世紀初頭に北部地域から現在の地に移動してきたとされ、1968 年に即位した現在の王・アブンビ 2 世 (Abumbi II) は、現在地に王国を移してから記録上では第 11 代目のバフツ王である。彼の父であった先王・アチリンビ 2 世 (achirimbi II) の死後、後継者に選ばれた彼は当時まだ十代であったⁱⁱ。その後、近代教育を受け、国立ヤウンデ大学政治学科を卒業した彼は、現在王国内の商業・木工関係の専門学校々長であり、教育や王国の文化に大変造詣が深い人物である。

特に、バフツやティカールの王国文化で重要な土着宗教では、神聖王の観念からもいえるように、人間界と自然界と霊界とがより大きな世界の一部を構成しており、それらの世界に存在する全てには「普遍的な力 (ntu)」が働いていると考えている。この普遍的な力をここでは「不可視の力」と表現することにしたい [ASOMBANG 1999:85-86]。これは具体的には「靈魂、祖霊、精霊、聖なるもの、神、生命、自然作用」などの力としてとらえられているようである。バフツ王国の社会組織、祭祀、王宮、民族芸術に接するたびに、彼らの宗教観の根底において、この「不可視の力」の働きが理解されているように思われる。例えば、ティカールの人びとが暮らす集落や住居の空間には、祖霊や精霊を祀る場所や聖地があり、それらにおいて祀られている数多くの神々に対して、王国の人びとは様々な祭祀の際には丁寧ⁱⁱⁱに供儀を行うのである。

バフツ王国にあるキリスト教会の牧師エロン・シュ

ウ (Aaron Su) 氏は、キリスト教とバフツの土着信仰とを混合させた世界観を以下のように語ってくれた。「最初この世界の創造神 (Nwingong) は人間の近くにいた。そのうち創造神は人間から離れて空の上に行ってしまった。人間の体は仮の姿であり、魂こそ永遠のものであるが、魂には良い魂と邪悪な魂の 2 種類がある。神から遠く離れ、これらの魂に取り囲まれた中で生きている人間を正しい道、神が示す道に導いてくれるのが祖先である。我々は祖霊を祈り供養することにより離れてしまった神に少しでも近づくことができる」。このようなコスモロジーは、先述した「普遍的な力」や「不可視の力」の働きを信じているバフツ王国の人びとの一般的な通念、観念であり、今後のティカールの人びとの文化遺産の保全と活用を考える際には、このような地域の人びとの価値観を理解することが重要であると、筆者は考えている。

アビンフォ祭り

(1) 祭りの概要

「アビンフォ祭り」とは、毎年 12 月にバフツ王宮を中心として開催される王国では最も盛大な祭りである。

本報告の内容は、2003 年 12 月 5 日から 19 日までの 15 日間、バフツ王宮を中心として行われた「アビンフォ祭り」に関する一連の儀礼の中で観察が許されたものについての現地調査報告とその考察である。アビンフォとは「王の踊り」を意味し、この祭りの中で王が人びとと共に踊ることは、王国にとって現王の生命力の復活・再生を象徴すると同時に、一年の締めくくりと新年を迎える区切りを意味する。12 月の冬至の頃は、バフツ王国が位置する標高約千メートルの高原地帯では乾季から雨季に移る季節である。農耕民・ティカールにとり、この祭りは農作物の収穫と祖先の庇護に感謝し、新年の豊作と人びとの幸せを祈る意味をもつ。

15 日間に渡って開催されるアビンフォ祭りの内容

表1 アビンフォ祭りの内容(2003年の場合)

月 日	時 間	場 所	祭祀内容	主 体
12月5日 (Yika)	16:00～ 22:00～	王宮周辺の道路各所 王宮	悪霊払い儀礼 ヌキアニカン(Nkia Nikang)の通知・公告	秘密結社ブス(Nda Beusu) 秘密結社バボ(Mbabo)、 秘密結社タクンバン (Takumbeng)
12月6日 (Yijong)	13:00	市場	アビンフォ(Abine-Mfor)の通知・公告	秘密結社クワイフォ(Quifor)
12月9日 (Mumitaa)	6:00～17:00 17:00～	王宮とその周囲	ヌキアニカン(Nkia Nikang)の取り替え (その間、王宮への部外者の立入厳禁) 清めの行進儀礼	秘密結社ニカン(Nda Nikang) ンチンダ(Nchinda)、タクンバン (Takumbeng) 秘密結社ブス(Nda Beusu)
12月10日 (Mitaniba'a)	5:00～12:00	王宮	秘密儀礼	秘密結社ندانシエ(Nda Nsie)
12月11日 (Nkoofikuu)	15:00	王宮	秘密儀礼	秘密結社ンガンクワイフォ (Nda Ngang Quifor)、 秘密結社クウェブル(Nda Kweburu)
12月12日 (Ntooba'a)	7:00	王国内の道路各所	悪霊払い儀礼	秘密結社ブス(Nda Beusu)
12月13日 (Yika)	10:00～22:00	王宮と王国内の聖地	聖職者達が王宮から王国各地の歴代王の祖霊が 宿る川・滝などの聖地へ赴き祖霊供養を行う。王は 秘密結社クワイフォの長とともに王宮内の屋敷神を 祀る。	王(Mfor) 秘密結社クワイフォ(Quifor) 聖職者集団(Buta Bunwi, Buma'a Bunwi)
12月14日 (Yijong)	5:00～16:00	王宮と王国内の聖地	薬草を採りに行く。 バツツ王国の聖なる旗チーテワラ(Tsitewarah)を ンゲンウイ川(Ngeunwi)で洗い清めて王宮の広場 に持ち帰る。	秘密結社ワウオ(Wa-woo) 秘密結社チーテワラ (Nda Tsitewarah)
12月15日 (Njwila'a)	16:00～ 19:00～	王宮内広場 王宮内	王の踊り、第1日目開始。 仮面クト(Kertoor)が登場する。	王家の人びと 秘密結社クト(Nda Kertoor)
12月16日 (Mbiindoo)	16:00～ 19:00～	王宮内広場 王宮内	王の踊り、第2日目開始。 仮面クト(Kertoor)が登場する。	王家の人びと 秘密結社クト(Nda Kertoor)
12月17日 (Mumitaa)	9:00～ 10:00～ 12:30～ 14:00～ 14:30～ 19:00	王宮 王宮内中庭 王宮 王宮内広場 王宮内広場 王宮内中庭	伝統的軍事結社マンジョン(Manjong)が王宮に招 待される。 加入儀礼ミンフォ(Mieh-mfor)が挙行される。 来賓への祝宴。 叙勲式 伝統的軍事結社マンジョン(Manjong)の祝祭行事 と、王、王家、王国国民による踊り。 主要メンバーへの祝宴。	楽団レレ(Lele) 王(Mfor) 王(Mfor) 王(Mfor) 全ての王国国民
12月18日 (Mitaniba'a)	17:00	王宮内広場と中庭	アビンフォ(Abine-Mfor)の終了儀礼。王宮内広場 に展示されていた王国旗や祖霊像を王宮内に仕舞う。	王、王家の人びと、秘密結社
12月19日 (Nkoofikuu)	7:00～ 18:00	王宮内中庭	祭りの終了に際し、王に収穫物を献上した女性達や 王女達へ、王から塩とヤシ油が分配される。 アビンフォ祭りの終了。	

・“DECEMBER 2003 ABINE-MFOR FORTNIGHT PROGRAMME”に加筆修正。

を祭りのスケジュールに従って検討すると、儀礼と祝祭という両側面が含まれていることが判る(表1)。さらに、祭りの儀礼は全て男性を構成員とする秘密結社が執行する。各秘密結社の構成員は世襲制であり、担当する儀礼が明確に定められている。

祝祭としての祭りが最高潮を迎える日は、祭りが始まってから十三日目(2003年の場合は12月17日)

である。この日は、朝から多くの参加者や来賓が王宮に参集し、普通アビンフォ祭りといえばこの一日を意味する。今回の現地調査では、一日目から祭りが終了する十五日目まで、王宮近くの村内に滞在して、多様な儀礼を観察することが許された。

(2) 祭りの内容

祭りを観察して印象的なことは、第一に「祓いの儀礼」が多いことである。一日目と八日目の2回、祭りが開催される王宮の入口にあたる各道路上に、薬草を用いた呪薬を埋めたり、蔓性植物の呪物を路上に置く儀礼が秘密結社・ブス (Nda Beusu) によって行われる (写真1・2)。王宮内に外部から悪霊が進入しないように、これらの清めの儀礼が行われる。王宮内の空間を清浄にすることが重要なのである。

また、二日目の祭りの直近にあたる市の日には、秘密結社クウイフォ (Quifor) によって市場において祭りの公告が行われる (写真3)。

十三日目に挙行される祝祭に先立つ一連の儀礼の中で、五日目に行われるマメ科の一年生作物・ササゲ (Nkia, *Vigna unguiculata*) の穀霊を祀る霊殿の周囲を囲う柵・ヌキアニカン (Nkia Nikang) の取り替え作業が重要な意味を持つ (写真4)。この作業はこの穀霊殿の管理を司る秘密結社ニカン (Nda Nikang)、王の使者・ンチンダ (Nchinda)、さらに、王子を構成員とする秘密結社・タクンバン (Takumbeng) の三者によって行われる。早朝に王宮近くの林から採取された新しいラフィアヤシの葉を用いて、穀霊殿の周りを取り囲む柵を新しくする作業は夕方までかかるが、その間、王宮の住人と子供以外は王宮内に立ち入ることを厳禁される。王宮への各入口にはワラ (wara) という名前の木の枝と葉で作られた杭 (agibe) が立てられ、その目印とする (写真5)。それほど、この穀霊殿の周囲を囲む柵を取り替える作業は慎重に行われ、いかにササゲの穀霊を祀ることが重要であるかが理解できる。

また、この儀礼を行う三者は、王国を構成する主要な三つの社会組織であるところの、王・フォン、王家以外の構成員による秘密結社・クウイフォ、王家の構成員による秘密結社・タクンバンであることから、農耕民の彼らにとって、農作物の豊穡のカミの象徴としてササゲの穀霊を祀ることの重要性を伺い知ることができる。



写真1 呪薬を道に埋めるブス結社員 (2003年筆者撮影)

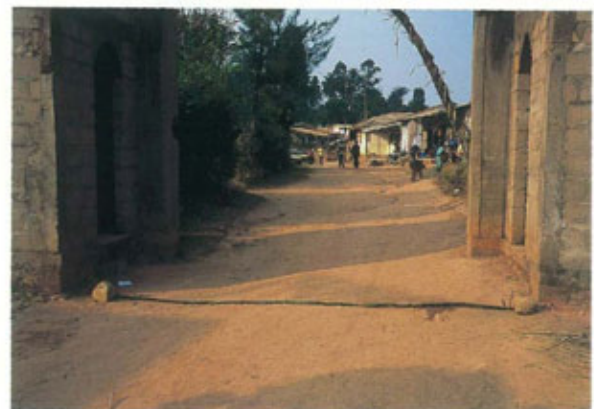


写真2 王宮入口の路上に置かれた蔓性植物 (2003年筆者撮影)



写真3 クウイフォ結社員による市場での公告 (2003年筆者撮影)



写真4 新しい棚に作り替えられたササゲの穀霊殿
(2003年筆者撮影)



写真5 王宮への立入厳禁を意味する杭
(2003年筆者撮影)

この日の夕方には、秘密結社・ブス (Nda Beusu) の行列が王宮内の結社員の空間から登場し、王宮内の各建物の入口や王宮への入口にあたる道路上に呪薬がふりまかれ、王宮内とその周辺部が清められる。行列は呪薬の入った土器を左肩の上に掲げ持つ秘密結社・クウィフォの長 (Tanda Quifor) を先頭に、二人のジュジュ (juju 精霊)、土器の皿を頭の上に載せた一人の女性、さらにその後、弦楽器・笛・太鼓を演奏する数名ずつの楽師が続く。これも祭りに先立つ一連の祓い

の儀礼の一つと考えられる。

六日目と七日目には王宮の背後にある森近くの奥まった秘密結社の空間において、秘密結社ンダンシェ (Nda Nsie)、ンガンクウィフォ (Nda Ngang Quifor)、クウェブル (Nda Kweburu) がそれぞれの儀礼を行う。今回これらの儀礼を観察することは許されなかったため、その詳細な内容は分からないが、彼らが信じる祖霊、精霊などのカミガミに対する供儀が行われるのであろう。

九日目に、王国の聖職者達 (Buta Bunwi, Buma`a Bunwi) は、王国内に十カ所存在する歴代王の祖霊が宿っていると信じられている川や滝などの聖地へ赴き祖霊供養を行う。最も遠い聖地・ネフォ (Nefo) は滝の一つで、王宮から徒歩で往復数時間かかる距離にある。彼らは担当する聖地ごとに数名ずつのグループを編成し、鉄製のダブルゴングを持つ者を先頭に、供養に使うヤシ酒、カムウッドの粉などを携帯する者が後に続く (写真6)。半年間は乾季でほとんど降雨の無い熱帯の気候条件において、王国を守護する祖霊としての歴代王達は、最も居心地の良い涼しく年中水の涸れない場所に今も生き続けていると信じられている。



写真6 聖地での祖霊供養に向かう聖職者達
(2003年筆者撮影)

これらの聖地で行われる祖霊供養の様子を直接観察することは今回許されなかったが、聞き取りによると、この儀礼において供物を載せた木の葉を聖地の水面に浮かべるとそれが水中に沈み、次に浮かび上がってきた時に供物が無くなっていれば、祖霊が願いを聞き入れたために祭りを開催して良いことを意味するのだという。聖職者達が聖地での祖霊供養を無事終えて祖先をたたえる歌を歌いながら王宮に戻ってくる際には、王家の秘密結社・タクンバンの太鼓が打ち鳴らされ、王女達が出迎える。アビンフォ祭りは、農耕儀礼の性格と共に祖霊供養の意味をもつ。

聖職者達はさらに、王宮内の屋敷神が祀られている聖地において祭祀儀礼を行う(写真7)。特に重要な屋敷神が祀られている王宮の奥まった場所における儀礼は、王自身が秘密結社クウィフォの長(Tanda Quifor)ともう一人の長老と共に。その際に、最高位の聖職者でもある王は、祭りに関連する宗教的儀礼を行う際の秘密結社員と同様に、上半身裸になり、下半身には藍染めの木綿布を巻いた装いで登場する。これまで着飾った王の姿にしか接したことのない筆者が、神聖王の雰囲気漂わすバフツ王のこのような姿を拝したのは今回が初めてであった。

十日目の早朝、秘密結社・ワウオ(Wa-woo)は、山へ薬草を採取しに行き王宮へ持ち帰る。その昔、王国の繁栄は強い軍事力を必要とした。秘密結社・チーテ



写真7 王宮内の屋敷神を祀る聖職者達(2003年筆者撮影)

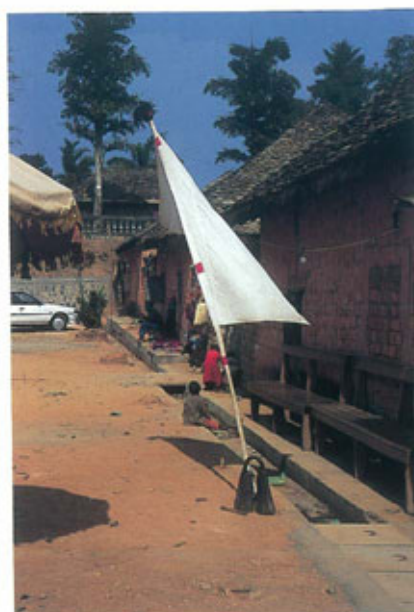


写真8 王国の聖なる旗チーテワラ(2003年筆者撮影)

ワラ(Nda Tsitewareh)は、勝利の象徴である王国の聖なる白い旗を管理する。この日の午後から、チーテワラ結社はこの旗を王宮内から持ち出しンゲンウィ川(Ngeunwi)で洗い清める儀礼を行う。その際、王の権威の象徴である象牙の笛が吹き鳴らされる。王は川で洗い清められた旗が王宮に戻されるのを待ち受ける。その後、この旗は祭りが終わるまで、王宮の広場に掲げられる(写真8)。この儀礼の後、いよいよアビンフォ祭りの開始が宣言される(Mboo Abine)。

これに続く十一日目と十二日目の二日間は、太鼓、木琴、笛などの伝統的な楽器を用いた楽隊を中心にして、王と王家だけによる踊りが王宮の広場で繰り広げられる。この踊りは十三日目の祭り本番の予行演習的な役目を果たす。アメリカ合衆国に留学中で祭りに合わせて5年ぶりに帰国した現王の第一夫人の長男も、家族と共にこの両日の祭りに久しぶりに参加していた。

この二日間の夜に、ササゲの穀霊を象徴する仮面・クトー(Kertoor)がクトー結社員(Nda Kertoor)によって霊殿(Nda Nikang)から持ち出され、王宮内にある王家の人びとの家々を巡る(写真9)。この儀礼において、王は村人に王の農場(Nso Mfor)で収穫された



写真9 ササゲの穀霊を象徴する仮面クトーを頭上に載せる結社員
(2003年筆者撮影)



写真10 王宮中庭での加入儀礼を行う
パフツ王 (2003年筆者撮影)

ササゲを分配し、その豊穰力を与える。五日目に行われたササゲの穀霊殿を囲む柵・ヌキアニカンを新しいものに取り替える儀礼とともに、穀霊の御神体である仮面・クトーの儀礼が行われることから、アビンフォ祭りは農耕収穫祭的な性格もあるといえる。

十三日目は、アビンフォ祭りの中心となる日である。この日は午前中から楽団・レレ (Lele) が村内を巡り、王宮で祭りがあることを知らせて回る。王国の七つの伝統的軍事結社マンジョン (Manjong) のメンバーも、祭りの参加者や見学者と共に王宮に集合する。午前中、王宮の中庭において、加入儀礼・ミンフォ (Mieh-mfor) が行われ、この儀礼を受ける者は王から名前と王に挨拶する地位を拝受する (写真 10)。また、来賓として招かれた近隣の王国の王、行政関係者、外国人などのために、王自らが昼食会を催す。午後からは王宮の広場において叙勲式が行われる。その年に王国や社会に対して功績のあった人びとに四種類の勲章が授与される。その後、鉄砲の上空への一斉発砲を合図にして、軍事結社・マンジョン (Manjong) の構成員による戦いの演技が披露される。この行事は、近隣の王国との

戦いの歴史を再現することにより、王に対する忠誠心を表現するものである。それに続いて、ついに王の踊りが始まる。王自身が立ち上がり、従者、秘密結社の長老、王家の人びとと共に踊るのである。この頃には王宮の広場は踊りに参加する者や見物人で溢れかえり、結社員や長老だけではなく、王国の老若男女が王を中心に踊るのである。祝祭としてのアビンフォ祭りの雰囲気は最高潮に達し、その場に参集した全ての人びとは、王と共に過ぎ去った年への感謝と新たに迎える年への願いと喜びを実感するのである。夜には、王宮の中庭で無事祭りが終わったことを労う王が主催の祝宴が開催される。この日は一日中、様々な祭礼が挙行されハレの場が演出されるのである (写真 11)。

翌十四日目の夕方に、王と王家が中心になって祭りを締めくくる儀礼が王宮で行われる。祭りの期間、広場に掲げられていた旗や展示されていた祖霊像が、王が見守る中、それぞれの秘密結社によって王宮内に仕舞われ、供儀が行われる。これらの聖なる旗と祖霊像は、祭りの期間の夜だけ登場するササゲの穀霊を象徴する仮面・クトと共に、王国繁栄の象徴であり、王国



写真11 従者と共に踊るバフツ王（2003年筆者撮影）

の秘宝である。祭りにおいてこれらの秘宝を公開するにあたり、王宮内と王宮への各入口において前述したような祓いの儀礼が丁寧に行われることから、如何にこれらが王と王国にとって人びとの願いがこもった大切なものであるかが分かる。武力、祖霊、穀霊を象徴するこれら三種の神器を公開するアビンフォ祭りは、王国の繁栄がこれらの伝統的な力によってもたらされるものであるという彼らの土着的な信仰の姿を示している。アビンフォ祭りに表れる彼らの信仰心が伝統的な地域の活力の源泉となっているのである。

祭りの余韻が冷めやめ最終日、王宮の中庭において、プランテン・バナナなどの収穫物を王に献上した村人や王女達に対して、王から塩とヤシ油が分配され、アビンフォ祭りは終了する。

アビンフォ祭りにおける彼らの信仰に基づく多様な儀礼を観察して分かったことは、普段は王と 50 人ほどの家族が静かに生活する場所にしかすぎない王宮が、まさしく王国で第一の聖地であるということである。王宮内には神聖王の住居空間を中心にして、聖なる森、秘密結社の儀礼空間、祖霊・穀霊・精霊の祭祀空間、祭礼に使う民族芸術品の収蔵空間などがあり、王国社会の土着宗教に基づく信仰の拠点となっているのである。

次項では、アビンフォ祭りの舞台となる王宮と民族芸術に関する最近の変容について考察をしてみたい。

バフツ王宮の博物館開設計画

(1) 文化遺産としての民族芸術

アビンフォ祭りが開催されるバフツ王宮の建物は、1891年のドイツ軍との戦いによって焼失し、当時のバフツ王は数年間、王国外へ追放された。そして王が帰還後、王宮の建物はバフツの人びととドイツ人の手により現在の美しい姿に再建された。そのような歴史的経緯から、ドイツ政府は傷みが激しい王宮内のゲストハウスを博物館として改修する事業に援助金を支出し、2003年11月にはドイツ大使が臨席して落成式が挙行された（写真12）。博物館内部の展示は今後の計画であるが、欧米を中心とする外国人観光客や国内旅行者が徐々に増加しつつある現状に対して、この博物館の開設は大きな意義をもつといえる。

バフツ王宮内には、このゲストハウス以外に数多くの建築物が整然と並んでいる。草葺きのティカールの伝統的建築様式で建築された歴代王の祖霊を祀る神殿（写真13）をはじめ、第一次世界大戦前のドイツ植民地時代に建てられた瓦屋根をもつ建物群や神聖な森を背後にした秘密結社が儀礼を行う空間が広がり、それらが組み合わさって美しい王宮の風景を構成している（写真14）。王宮は単に王の住まいであるだけでなく、カメルーンという近代国家が誕生する以前には、政治、行政、司法、宗教、軍事に係わる独立した力をもつ王



写真12 博物館として改装されたゲストハウス（2003年筆者撮影）



写真13 伝統的建築様式の祖霊殿
(2003年筆者撮影)



写真14 聖なる森を背後にした王宮の佇まい
(2003年筆者撮影)

国の都の中核として機能していたのである。そのため王宮内の建物や中庭の空間的配置やそれらの機能を知ることにより、元々王宮が果たしていた役割を現在においても理解することができる。

王宮の建物群だけではなく、バフツの民族芸術は、創造神を頂点として祖霊などの様々な靈魂の存在を信じるアニミズム的な宗教観に基づき、神聖王と秘密結社をはじめとする、複雑な王国社会の組織が執り行うアビンフォ祭りを始めとする様々な祭礼時に登場する



写真15 アビンフォ祭りの期間中に展示される祖霊像
(2003年筆者撮影)



写真16 王宮内で販売される民芸的土産品
(2003年筆者撮影)

(写真15)。それらは仮面や人像や楽器、また舞踊そのものであったりする。これらは本来、祭祀に用いられることを前提に制作されるものである。しかし、これらの祭祀具が博物館で展示される際は民族芸術品として観賞され、また王宮の一角の土産店でコピーによる民芸的土産品として販売されたりと、本来の儀礼的な用具とは異なったものとして取り扱われる(写真16)王宮または博物館で展示される祭祀具が、民族芸術品として文化遺産に評価され、さらに観光土産として収入資源の価値をもつようになってきたバフツ王国にあって、今後対応していかなければならない課題がここに生じている。

北西州の州都・バメンダなどの都市では、これまで

神聖王を崇める王制社会で使用されてきた祭祀具を模造したものが多く土産物として販売されている。それ自体問題はないのである。しかし、文化の商品化によって起こる重要な問題は、商品化が浸透することによって、各王国で育まれてきた祭祀具を通しての世界観や宗教観が変容し、失われてしまうことであると筆者は考えるのである。人間に対して「不可視の力」を働きかける靈魂の姿やイメージを表した祭祀具が、外来の人びとによって民族芸術品あるいは土産品として捉えられ、本来の意味することを理解している人びとが今後減少することで、むしろ観光資源としての民族芸術品的価値をも、無くしてしまうことになるのではないかと思うのである。

バフツ王国では王宮の修復と博物館開設計画が進行中である。民族芸術の展示を前提とした博物館の開設が、生活の中で使用するものから鑑賞するものへと民族芸術の社会的役割を大きく変化させることになる。民族芸術に関するこの課題について、次項において詳細に検討していくことにしたい。

(2) 博物館開設計画の意義

博物館開設計画は、北西州の代表的な文化遺産として、その価値を認められているバフツ王宮が年々、老朽化してきたことから、1993年に始まったこの王宮の建物を修復する計画の一部としてゲストハウスの建物を修復し、博物館としての新たな利用を図る目的で実行されたものである。現在までに独立前の旧宗主国であったイギリスとドイツからの援助により王宮修復計画の約半分が達成されたという。しかし、近年になって計画を完了するための資金が不足し始め、その計画内容について再検討を加えるために、2000年3月にバフツ・マンジョンの特別幹部たちも交えての宮廷会議が王の臨席を得て開催された。

その議事録によると計画内容は次の五つに大別される。

①広場の観覧席・門の新設・修復 ②王宮内建築物の屋根の修復 ③王宮の排水施設整備 ④博物館の開

設 ⑤神殿の修復

これらの今後の総予算額は約 74,000,000CFA (約 14,800,000 円) で、不足する財源を確保する方針として、神聖王によるカメルーン国内巡行、寄付依頼記事を観光パンフレットに記載すること、全ての王国内の成人男女から寄付金を徴収することなどが決められた。資金を確保した上で、バフツ王宮の修復と博物館開設の計画を3年後の2003年までに実現させることが出席者全員によって確認された。博物館開設事業は、前述したようにほぼ計画通りに竣工することができた。

王宮の修復・博物館開設に取り組む王国の人びとの様子から、従来の神聖王と王制社会組織がこの修復計画を期に、変容しつつあることを垣間見ることができると。例えば神聖王やバフツの人びとが、王国外に居住するバフツ出身の各界の名士たちに建設資金や情報提供など、多くの期待を寄せていることが注目される。さらに王宮の維持管理といった王国の重要案件に対して、これまでのように王国内の取り組みだけでは限界が生じることを、王自身が認識していることである。そして、バフツ王自身がアビンフォ祭りなどに各国大使を招待するなど、様々な働きかけを行い、各国政府から援助を引き出そうとしているのである。つまり、神聖王国が現代社会を生きてゆくために、バフツ出身者の王国外部へと広がる人的ネットワークを最大限に利用しようと動いているのである。また、文化遺産や観光資源として王宮の修復をすることや、バフツの祭祀具を展示する博物館を開設するという計画内容や、この計画を実現しようとする手段を見ていると、カメルーン政府に頼らず、自力で地域外に接触し、王国の自律性を内外に知らせようとする、これまでの地域社会の姿も浮かび上がってくるのである。

博物館開設計画の具体的な内容は、総予算額が約 3,300,000CFA (約 660,000 円) で、王宮内に現存する三つの既存建物を改装あるいは修復して利用するものである。三つの博物館といっても一般に公開されるのは、前述したゲストハウスを改装して、新たに公開博物館

として使用されるのみである。残りの二つの建物は原則的に非公開のものである。その一つは普段には一般の王国民の目に触れることをタブーとする仮面や人像などを収蔵する収蔵庫（神聖博物館）であり、他の一つは歴代の王の祖霊が祀られている神殿の修復である。

これらの三つの建物内に主として収蔵される祭祀具の多くは、神聖王や秘密結社を代表とする様々な王制社会組織の構成員が祭礼や儀式において使用するものである。そのため、バフツの人びとの観念的世界観にあつては、ヒトに対しての「不可視の力」を作用させる「霊魂、祖霊、精霊、神」などがイメージ化されて造られた木彫り像や、王の神聖性を示す品々であり、日常の場では見ることでできないものである。

しかし、このように日常的に王宮内にある博物館、さらに如何なる理由があつても一般階層の人びとが見ることのできない収蔵庫、神殿といった三つの建物を修復または新設する計画が必要な理由は、各々に所蔵される造形品の性格に由来している。例えば秘密結社の特定の構成員が特定の儀礼において使用する物は、他の時空間において本来の目的以外でもって公開することは許されないのである。これは人びとがその造形品の物質的・美術的価値ではなく、その背後に潜む超自然的な神秘性にその存在価値を認めているからに他ならない。本来使用すべき状況以外において、人の目に触れることによって、それぞれの造形品が持つ力が失われてしまうと考えられているのである。宗教的造形品を単なる一つの民族で伝承されてきた「芸術品」の展示物として、一般に公開する際の大きな課題であろうⁱⁱⁱ。

バフツ王宮の現状では、外国人やバフツ地域以外の出身者のようなバフツ王国の部外者に対して、これらの民族芸術品を観光や研究の目的に応じて、王の判断により公開しているものもある^{iv}。今後、博物館が公開され様々な民族芸術品が展示されるようになれば、それらが本来有している信じられてきた「不可視の力」について、どのように解説していくのが問題と

なろう。その前提にはバフツの人びとがそのような世界観、宗教観を持ち続けていくことと、王国を訪れる観光客が異文化であるバフツの人びとの心を理解しようと努力することが重要になる。民族芸術品を王宮内の博物館において展示公開するにあたり、先述したように変容してはならないアイデンティティが何であるかを地域住民自身が自覚することを必要とするのである。

博物館の開設は、伝統的な王国文化に対してこれらの新しい課題を提起することになる。しかし、近代化の過程において衰退しつつある王国文化を未来に向かって伝承して行くには、神聖王を支える王制社会組織、祭りや儀礼などの活動の拠点である王宮、さらには彼らが伝承してきた多様な民族芸術品などの有形・無形の文化遺産の価値をより多くの人びとに伝える努力が必要である。王国文化の遺産を保全しそれらの価値を伝承する拠点として、今回、竣工した博物館はきわめて重要な役割を果たすべきものである。

考察

本論文は、カメルーンの一王国・バフツで開催されるアビンフォ祭りと、その舞台となる王宮について現地調査をした結果を基にして、ヒトが厳しい自然環境の中でどのように力強く暮らしているのかという民族文化の特徴を明らかにし、そこから、今後のヒトと自然とのあるべき関係を考察したものである。この内容は、あくまでも限られた調査に基づく事例報告にすぎないが、筆者の問題意識は、次のようなところにある。

今後、真に豊かな地域社会を創造するために、我々は近代化を進める過程において、様々な環境問題を引き起こしてきたこれまでの地域開発のあり方をどのように変えていかなければならないのだろうか。その疑問に対して、本論文の冒頭において提起した課題は、「地域力」を高めるという目標を設定することによって人びとの価値観を変えることが、地域計画の評価自体を変えることにつながるのではないかと、ということである。

何故、経済的・物質的に貧しいアフリカ、カメルーンの農村部の人びとが、アビンフォ祭りで見せたような豊かな表情をしているのだろうか。生きる意味を理解しその喜びを全身で表した彼らの姿に貧困のイメージは無い。環境デザインという専門分野に身を置いてきた筆者は、経済的・物質的な豊かさを追求してきたこれまでの地域計画の目標を、もう少し幅広いものに変えなければならないと漠然とは考えていたが、ティカールの人びとの王国文化に触れたことにより、地域の生態学的特性や地域社会の歴史文化的特性に応じた環境整備と生涯学習機能の充実を図ることによって「地域力」を高めることが重要であると考えようになった。

地域において博物館の様な生涯学習機能を提供できる施設や場所を整備することは、長期的な観点から重要な計画目標となる。バフツ王国は、現在かつて無いほどの文化変容の波を受けている。ティカールの人びとに限らず、現代の我々は、地球規模の環境変化の影響を否応無しに被る社会に生きているといえる。これまでの地球と人類の歴史の中で生み出されてきた多様な自然や民族文化の差異と共通点を認識することにより、それらの価値を再評価し、今後の民族芸術と環境デザインを考える糸口とすべきであると筆者は考える。

カメルーン共和国北西州だけでもバフツの様な 200 以上の王国が存在し、毎年、乾季の終わりにあたる 12 月から 1 月にかけて、アビンフォ祭りを一例として多様な祭りが開催される。祭りは地域の活力を知る手がかりを与えてくれるものでもある。今後も許されるならば、カメルーンの王国文化を一つの手がかりにして、より広くアフリカや日本を始めとして世界各地の民族文化を比較検討することにより、ヒトと自然との関係について考えて行きたいと思う。

謝辞

本稿は 2004 年 5 月の日本アフリカ学会学術大会(於、

中部大学) で口頭発表した内容をもとに記述したものである。本論文を作成するにあたり、現地調査の機会を与えていただきました大阪芸術大学学長、深田尚彦先生、環境デザイン学科長、狩野忠彦先生にお礼申し上げます。また海外調査中、環境デザイン学科の先生方にはご迷惑をお掛けいたしました。さらに、名誉教授、森淳先生及び、工芸学科教授、井関和代先生には、研究を進める上で有益なご助言をいただきました。現地ではバフツ王、アブンビ 2 世を始め、多くの方々のお世話になりました。ここに謹んで謝意を表します。ック編、28-40、大阪：NHK サービスセンター。

註

- i カメルーン国内に現存する数多くの王国の大半は、人口規模が数千人から数万人の小規模な首長国 (chiefdom) であるが、神聖王を中心とする複雑な王制社会組織をもつことから、本論文で対象とするバフツも王国として表現することとする。
- ii 王の世代交代にあたり、秘密結社の大長老である数名のキングメーカー達は、新王の任命を行うが、バフツの現王を選任するにあたり、兄弟間での権力抗争があったという。ティカールの王権社会において、このような権力闘争は珍しいことではなく、時には王国が分裂することもあった。キングメーカー達が新王を選任するのであるが、最終的には王自身が王国の人びとにどれ程、尊敬され信頼されているかによって、王の権威が決まるのである。
- iii 吉田憲司氏は、20 世紀を通じて民族学博物館における民族誌展示の試みと平行して、アフリカやオセアニアの仮面や彫像が「ニグロ美術」「プリミティブ・アート」「トライバル・アート」と総称を変えながら、美術家、美術商、美術収集家、美術史家、美術館などからなる、「美術」をめぐる一連のシステムのなかからみとられ、美術館にオブジェとして展示されることで、「美術」に仕立て上げられたことを指摘し、西洋近代における「真正の民族誌資料(民族芸術)」という概念の創造は、じつは「モダン・アート」という概念の創造と一体になったものであると指摘する。そして、西洋が自己を中心とした世界システムを形成していく過程で、非西洋は「他者」化され、受動的な対象として表象されてきたと述べ、「異文化へのまなざし」のなかにある自他の区別のねじれをみつめなおす必要を説いている [吉田憲司 1997 : 36-40]。
- iv 筆者がバフツ王宮内において撮影した民族芸術品の写真は、バフツ王の許可を得た上で撮影し公開するものである。

参考文献（アルファベット順）

- Asombang, R. N.
1999 “*Sacred centers and urbanization in West Central Africa*”, In *Beyond Chiefdoms: Pathways to Complexity in Africa*, Edited by S. K. McIntosh. Cambridge: Cambridge University Press.
- 端信行
1987 「王のダンス——カメルーン高地における王の儀礼」『アフリカ民族学的研究』和田正平編、127-145、京都:同朋社。
- Jahn, J.
1961[1987] “*Muntu: An Outline of the New African Culture*”, New York: Grove Press, Inc.
(黄寅秀訳『アフリカの魂を求めて』、東京:せりか書房)
- Ritzenthaler R. & P.
1962 “*Cameroons Village: An Ethnography of the Bafut*”, Publications in Anthropology 8, Milwaukee Public Museum.
- Soh, B. P.
1987 「カメルーン高地社会における王権の象徴——その意味と役割」端信行訳、和田正平編著『アフリカ民族学的研究』、105-126、京都:同朋舎。
- 下休場千秋
1991 「ティカール族の首長制社会における伝統的住居」『西アフリカにおける伝統工芸技術の比較研究』代表者森淳、文部省科学研究費補助金（国際学術研究）報告書、77-108、大阪芸術大学。
1992 「ティカール族の風土と宮殿空間——中央アフリカ・カメルーン共和国の現地調査より」『藝術』15、48-60、大阪芸術大学。
2001 「自律的観光と民族芸術——カメルーン共和国の事例を中心に」『国立民族学博物館調査報告 21 ヘリテージ・ツーリズムの総合的研究』、石森秀三・西山徳明編、173-188。
2002 「中央アフリカ、カメルーン共和国における神聖王国のコスモロジー——ティカール族の事例を中心に」『藝術研究』第6号、191-208、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科。
2003 「カメルーン共和国、ティカール王国文化の変容——バフツ王宮の博物館計画を事例として」『民族芸術 VOL19』188-198、民族芸術学会編。
- Tabuwe, A.
1978 “*Achirimbi II: Fon of Bafut*”, Yaounde: Agracam.
- 吉田憲司
1997 「まなざしの刻印をたどる——博物館と美術館のなかの「異文化」」『異文化へのまなざし』吉田憲司、ジョン・マ